

はしがき

本報告書は、平成17年度に採択された文学部プロジェクト研究「洛陽の史的研究」の報告書である。

洛陽は周知の通り中国で最も古い都の一つであり、長安と並ぶ中国文化の中心地であった。遣唐使も長安に至る途中、東都の洛陽を経由したし、長安まで至らずとも洛陽で朝貢を果たすこともあった。日本でも洛陽は長安と並ぶ都の代名詞となり、平安中期には京都を洛京とか洛陽とか呼ぶことも始まったらしい。その時代の中国の都は概ね開封であって洛陽は副都であったが、伝統と文化の都としては洛陽のイメージが強かったのであろう。

とはいえ、今日、長安なら誰しも華やかな国際都市のイメージが思い浮かぶであろうが、洛陽のイメージが浮かぶ人は少ないであろう。実際に研究の分野においても長安に比べれば洛陽の研究は乏しいのである。これには文献史料が相対的に少ないということや、西安がいまでも陝西省の省都であるのに対して、洛陽は河南省の省都でなく、研究機関の数も少ないということがあったろう。

ただし、その状況は今日急速に変わりつつある。経済の発展にともない地下に眠る大量の史料が発見されるようになり、政府もそれらの整理と保護に力を入れるようになっていのである。洛陽盆地には、夏王朝の遺跡とされる二里頭遺跡を始め、東周王城、漢魏洛陽城、隋唐洛陽城など歴代都城の遺跡があり、それに付随する各時代の無数の墓葬が存在している。とくに北魏時代以降の墓葬からは多くの墓誌が出土しており、新発見の墓誌だけでも優に千を超えといわれている。そして世界遺産の龍門石窟をはじめとする数多くの仏教遺跡がある。これらに対する調査・研究の成果が、いま続々と発表されるようになっており、洛陽はいま我々中国古代史研究者から熱い視線を注がれている都市なのである。

ところで、岡山市は洛陽市と長く国際友好交流都市の関係を結んでおり、本学部の東洋史の学生も過去何人もが市の交流事業を利用して洛陽への留学を果たしている。民間の文化交流も盛んであり、研究面においても本学部から何か発信するところがあってもよいのではないかと思われた。ちょうど山口和子先生を代表者とするプロジェクト研究「日本における美的概念の変遷」において中国文学の下定先生や橘先生と研究会を重ねることがあったので、ひとまず両先生とともに歴史と文学の両面から洛陽文化の特色を研究してはどうかと考えた。幸い両先生の協力が得られ、山口先生も賛成してくださったので学部長裁量経費に応募したのが本プロジェクトである。ここに予定の三年間の研究を終了したので、本報告書によってその成果を報告する。

なお、本研究会では、岡山市と洛陽市の交流がどのように行われているかを知りたいと思い、2006年10月14日に、岡山市役所中国歴史文化研究会の出宮徳尚さんを講師にお迎えし、「岡山市と洛陽市の学術交流（考古学）―その1 パターン」と題する講演をしていただいた。同会は洛陽市の考古学者や文化人を岡山市に招く交流事業を長年にわたって続けており、いわば民間ベースで両市の交流を支えてきた会である。出宮さんはその会を立ち上げた人で、いまでも交流の中心となって活躍しておられる。実は2006年1月と3月に私が洛陽を訪れた際にも、同会の招きで岡山に来たことがあるという何人かの考古学者と出会った。また私が本学教員ということで行く先々で歓迎を受けたのも、こうした交流の恩恵であろう。この講演会では、そうした交流の具体的なあり方やご苦労などをお聞きすることができ、大いに参考になった。その後も出宮さんには同会の活動に関する沢山の資料を送っていただいたり、同会主催の講演会やレセプションに招いていただいたりするなど交流が続いている。この場を借りてお礼を申し上げたい。

2008年3月8日 佐川英治記